

藝 錄

個性の理解

—小ぶさき思索—

個性の奥深き殿堂に到る道はテゝべの町の門の數のやうに多い。私の一日の生活は私の信仰の生ける告白であり、私の個々の行爲は私の宗教の語らざる傳道である。私の衷に去來する諸々の心は自我の堂奥に祀られたものゝ直接的な認識を私に喚起させるために生成し、發展し、消滅する。それ故に有限なるものを通して無限なるものを把握し得る者は、私の唯だ一つの思想、感情若くは行爲を知ることによつてさへ、私が眞なる神の信者であるか或はバールの僧侶であるかを洞察し得る

であらう。併しながら多くの道があると云ふことはその意味を掴み得ない者にとつては單に迷路があると云ふことに過ぎない。

私は私の衷に無數の心像が果しなく終なく生滅するのを意識する。私と云ふ個性は私の脳裡に成壞する限なき表象や感情や意欲の *forum disiectum* であるのか。それは「觀念の束」でもあるのか。けれど私は私の一切の活動が唯だ私に於て起ることを知つてをる。私と云ふ個性は無數の心像がその上に現はれては消えつゝ様々な悲喜劇を演ずる

三 木 清

舞臺であるのか。それは凡てのものが其處へ這入つて行くが何ものも其處から出て来ない「獅子の住む洞穴」でもあるのか。併し私は私の精神過程の生成と消失、生産と消滅との一切が唯だ私に因つて行はれることを知つてをる。

私の個性にして私のあらゆる運動と變化とがその前で演ぜられる背景であるならば、それは實に奇怪で氣味の悪い *Unding* であるに相違ない。私はそれに指示し得べき如何なる内容をも與へることが出来ない。なぜなら私がそれに就て表象する性質は悉くこの背景を俟つて可能なのであつて背景そのものではないからである。従つてそれは最早個性であることをやめねばならない。私はかやうなものを唯だ何物でもなくまた何物からも生じない抽象的實體として考へ得るのみである。かくして私は虚無觀の前にたゞずび。私によつて決して體驗されることがないこの惡魔的な

Unding は、私が經驗する色あり、響ある凡ての喜びと悲しみとを舐め盡し、食ひ盡してしまふ。併し私はこの物より再び七彩の交錯する美しき世界へ歸るべき術を知らないのである。

私は固より「萬の心を有つた人」である。寧ろ私は私の内部で絶えず聞き合ひ、唾み合ひしてをる相反對し、相矛盾する心の *coincidentia oppositorum* である。併しながら私はこれら無數の愛し合ひ、助け合ふをして實に屢々憎み合ひ、挑み合ふ心の *aggregatum per accidens* ではなすであらう。或はそれらの心像が單に心理的法則に従つて結合したものでなからう。私にして無數なる「觀念の束」に過ぎないとすれば、心理學者が私を理解しやうとして試みる説明は正當である。彼等は私の裏に去來する精神作用を一定の範疇と法則とに分類し、總括し、更に私の記憶が視覺型に屬するか、聽覺型に屬するか、進んでは私の性格が

多血質であるか、胆汁質であるかをさへ決定する。けれど抽象的な概念と言語とはあらゆるものから鮮かな個性を奪つて一様な黒塊を作り、ペーターとバウルとを同一にする悪しきデモクラシーを行ふものである。私は普遍的な類型や法則の標型若くは傳達器として存在するのであるか。それでは私は大膽にも云はねばならない、「私は法則のためにはなく例外のために作られたやうな人間の一人である。」七つの天を量り得るとも誰が一體人の魂の軌道を計ることが出来やう。私は私の個性が一層多く記述され定義されることが出来れば出来るほど、その價值が減じてゆくやうに感じるのである。

人は私に個性が無限なる存在であることを教へそして私も亦さう信じた。「地球の中心」と云ふ概念のやうに單に一あつて二ないものが個性ではない。一號、二號など、區別せられて客觀的な個別

性或は他との比較の上での獨自性を有するものが個性であるのではない。個性とは却つて無限なる存在である。私が無限なる存在であると云ふのは、私の心裡に限なき表象や感情や意欲が果しなく交替すると云ふ意味であらうか。けれども若し私にして極みなき精神過程の單に偶然的若くは外面的な結合に過ぎないならば、私は唯だ現象として存在し得るばかりである。私にして現象である以上の意味をもつことが出来ないならば、永劫なる時の流の一つの點に浮で出でる泡沫に比すべき私の生に於て如何に多くのものがその裡に宿せられやうとも、いづれは順臬にして消えてゆく私の運命ではないか。諸々の太陽をも容赦しない時の經過は、私の腦裡に生滅する心像の無限をひとたまりもなく片付けてしまふであらう。それ故に私にして真に無限なる存在であるべきならば、私の裏に時の生み得ずまた時の滅し得ざる或物が存在す

るのでなければならぬ。

けれども私は時間を離れて「個性化の原理」を考へることが出来るだらうか。個性とは一回的なもの、繰返されないもの、謂ではなからうか。だが私は單に時間的順序に依つてのみ區別されるメトロノームの相繼いで鳴る一々の音を個性と呼ぶことを躊躇する。時間は個性の唯一性の外面的表徴に過ぎないのであつて、個性は本質的には個性自身のはたらしそのものに於て區別されねばならぬ。個性の唯一性はそれが獨立なる存在として「他の何物の出入すべし窓を有せず」、自足的な内面的發展を遂げるところに成立するのであつて、個性は *selbständig* なものであるが故に *selbstmüher* *schleidend* なものとして自己の唯一性を主張し得るのである。固より私が世界過程の如何なる時に生を託するかと云ふことは、恰も音樂の一つの曲の如何なる瞬間に或る音が來るか^と云ふことが偶

然でないやうに、偶然なことではないであらう。

それは私と云ふ個性の内面的な意味の關係に依つて決定せられるのである。併し私は、時間^の形式によつて音樂を理解するのでなく却つて音樂に於て眞の時間^{そのもの}を體驗するのである。「自然を理解しやうとする者は自然の如く黙して之を理解せねばならぬ」と云はれたやうに、個性を理解しやうと欲する者は時の流のざわめきを超越しなければならぬ。彼は「能辯を捕へてその頸を捻ぢねばならない。」けれど私が時の流を離脱するのは時の経過の考へ盡すことが出來ぬ遙かの後に於てはなくて、私が「流るゝ時」の中に自らを没して眞の時そのものとなつたときである。認識の形式としての時間から解放されて「純粹持續」に自由に身を委せたときである。眺めるところに個性の理解の道はない。私は唯だはたらくことによつて私自身を理解し得るのである。

一様に推移し流下する黒い幕のやうな時の束縛と羈絆とから遁れ去るとき、私はまた無限を獲得するのでないか。なぜなら *selfishness* なるものは必ず無限なものでなければならぬからである。單に無数の部分から合成されたものが無限であるのではなくて、無限なるものに於ては部分は、全體が限定せられて生れるものとして、いつでも全體を表現してをる。そして私の凡ての魂を投げ出してはたらくとき、私の個々の行爲には私の個性の全體が現實的なものとして常に象徴されてをるのである。無限なるものは一つの目的または企圖に統一せられたものであつて、その發展の一つの段階は必然的に次の段階へ移りゆくべき契機をその裡に含んでをる。理智の技巧を離れて純粹な學問的思索に耽るとき、感情の放蕩を去つて純粹な藝術的創作に従ふとき、欲望の打算を退けて純粹な道德的行爲を行ふとき、私は確に斯くの如き無限

を體驗する。思惟されることが出來ず唯だ體驗されるものが出來る無限は、常に價値に充ちたもの即ち永遠なるものである。それは、意識されるにせよ意識されぬにせよ、規範意識によつて一つの過程から次の過程へ必然的に導かれる限なき創造的活動である。そしてかやうな必然性は勿論因果律が興へるところの必然性ではなくて、超時間的にして個性的な内面的必然性である。

併しながら私は私が無限を體驗すること即ち私が眞に純粹になり得ることが極めて稀であることが告白しなければならぬ。私は多くの場合「人はそれを理性と名けてひとりあらゆる動物より一層動物的になるために用ゐてをる」とメフイストが嘲つたやうな理性の使用者である。私の感情は大抵の時生産的、創造的であることをやめて怠惰になり横著になつて、媚と芝居氣とに充ちた道樂をしやうとする。私の意志は實に屢々利己的な打

算が紡ぐ網の中に捲き込まれてしまふのである。かくて私は個性が搖籃と共に私に送られた贈物ではなく、私が勇しき戦を以て獲得しなければならぬ理念であることを知つた。併し私はこの量り難き寶が自己の外に尋ねらるべきではなくて唯だ自己の根源に還つて求めらるべきものであることも知つた。求めると云ふことはあるがまゝの自我に執しつゝ他の何物かをそれに附加せると云ふことではない。人は自己を滅すことによつて却つて自己を獲得する。それ故に私は偉大なる宗教家が「われもはや生けるにあらず、キリストわれに於て生けるなり」と云つたとき、彼がキリストになつたのでなく彼が眞に彼自身になつたのであることを理解する。私の個性は唯だ更生によつて私の衷に生れることが出来るのである。

哲學者は私に個生が無限なる存在であることを次のやうに説いた。個性は「宇宙の生ける鏡」に

して「一にしこ一切」なる存在である。恰も相集る直線が作る無限の角が會する單一なる中心の如きものである。「凡ての個別的實體は神が全宇宙に就て爲した決意を表はしてをる」のであつて、一個の個性は全世界の意味を唯一の仕方で現實化し具體化する *mikrokosmos* である。個性は己自身の中に他との無限の關係を含みつゝ、しかもそれが全體の中に於て占める比なき位置によつて個性なのである。それでは私は如何にして全宇宙と無限の關係に立つのであるか。この世に生を享けた、また享けつゝある、または享けんとする無数の同胞の中で、時空と因果とに束縛されるものとしての私が知り得る人はまことに少いではないか。この少數の人に就てさへ彼等の一切と絶えず騒しき交渉にあることは私を *misanthrop* にしてしまふであらう。私は寧ろ孤獨を懂れる。併しながら人は賑かな巷を避けて薄暗い自分の室に歸つたとき眞

に孤獨になるのではなくて、却つて「人は星を眺めるとき最も孤獨である」ことが出来るのである。永遠なるものゝ靜觀の中に自己を失ふとき私は美しい絶對の孤獨に入り得るのきある。

併らば私は哲學者が教へたやうに神の豫定調和に依つて他との無限の關係に這入つてゐるのだからか。私は神の意志決定に制約されて全世界と不變な規則的關係に立つてゐるのもあらうか。それでは私は一つの *Missen* に機械的に従つてゐるのであり、私の價值は結局私を超えて普遍的なものに據つてゐるのではないか。私は寧ろ自由を憧れる。そして私は私が本當に自由であることが出来るのは、私が理智の細工と感情の遊戯と欲望の打算とを棄て、純粹に創造的になつたときであると思ふ。かやうな孤獨とかやうな創造との中に深く潜み入るとき、詩人が *Voll milden Ernsts, in thatenreicher stille* と歌つた時間に於て、私は全宇

宙と無限の關係に立ち、一切の魂と美しき調和に抱き合ふのではなからうか。なぜならば私はそのとき如何なる無限なるものもその中では與へられない時間的な世界から逆に超脱して、宇宙の創造の中心に自己の中心を横へてゐるのであるからである。自由なる存在即ち一個の文化人としてのみ私は、所謂社會の中で活動するにもせよしないにせよ、全宇宙と無限の關係に這入るのである。斯くの如くしてまた、個性の唯一性はそれが全體の自然の中で占める位置の唯一性に存するのではなくて、本質的にはそれが全體の文化の中で盡す任務の唯一性に基礎付けらるべきであることを私は知るのである。

個性を理解しやうと欲する者は無限のこゝろを知らねばならぬ。無限のこゝろを知らうと思ふ者は愛のこゝろを知らなければならぬ。愛とは創造であり、創造とは對象に於て自己を見出すこと

であり。愛する者は自己に於て自己を否定して對象に於て自己を生かすのである。「一にして一切なる神は己自身にも秘密であつた、それ故に神は己を見んがために創造せざるを得なかつた。」神の創造は神の愛であり、神は創造によつて自分自身を見出すのである。人は何物かを愛して自己を純粹な創造的活動の中に見失ふとき、自己を獨自なる或物として即ち自己の個性を見出す。併しながら愛せんと欲する者には常に愛し得ざる嘆きがあり、生まんとする者は絶えず生みの悩みを経験せねばならぬ。彼は彼が純粹な生活に入らうとすればするほど、利己的な工夫や感傷的な戯や小賢しい技巧が愈々多くの誘惑と強要とを以て彼を妨げるのを痛感しなければならぬ。そこで彼は「われは罪人の首なり」と叫ばざるを得ないのである。私達は悪と誤謬との苦しみに血を流すとき、懺懺と祈とのために大地に涙するるとき、眞に自分

自身を知ることが出来るのである。怠惰と我執と傲慢とほど私達を私達の本質の理解から妨げるものはないと思ふ。

自己を知ることとはやがて他人を知ることである。

私達の魂が自ら達した高さに應じて、私達の周圍に次第に多くの個性を發見してゆく。自己に對して盲目なる人の見る世界は唯一様な灰色であるに過ぎない。自己の魂を瞬せざる眼を以て凝視し得た人の前には一切のものが光と色との美しき戯に知て擴げられる。恰もすぐれた畫家がアムステルダムテルダムの猶太街にも常に繪畫的な美と氣高い威嚴とを見出し、その住民がギリシア人でないことを決して憂ひなかつたやうに、自己の個性の理解に透徹し得た人は最も平凡な人間の間に於てさへ鮮かな個性を掴むことが出来るのである。かくして私はこゝでも個性が興へられるものではなくて

獲得せられねばならぬものであることを知つた。私は唯だ愛することによつて人の個性を理解する。分ち選ぶ理智を棄て、抱き擁へる情意に依つてそれを知る。場當りの印象や氣紛れな直觀を以てはなく、辛棒強き愛と忍耐な洞察とに依つてそれを把握するのである。併しながら愛すると云ふことは如何に困難であるか。「なんぢ心を盡し、精神を盡し、思を盡して主なる汝の神を愛すべし、これは大にして第一の誠なり、第二も亦之にひとし、己の如く汝の隣を愛すべし」と云はれたやうに、永遠なるものゝ愛と結合しない隣人の愛は眞の愛ではないのであらう。かくて私は終に悲しくも告白しなければならぬ、私は私自身を知らない、そして他の何人をも理解しない。(二〇)

五・一〇)